

4. 刊行物・主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

4.1. 刊行物

気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

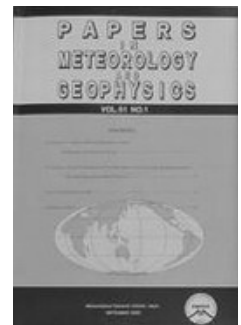
研究成果の学術的な公表を目的とした季刊の論文誌(ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論(レビュー)を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署など(国内約 700 箇所、国外約 250 箇所)で、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは 独立行政法人 科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム“J-STAGE”に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

平成 18 年度は第 57 巻として計 1 冊を発刊し、次の論文を掲載した。



第 57 巻

- ・ Fujibe, F., N. Kitabatake, K. Bessho and S. Hoshino: Comparison of surface-wind fields between Typhoon 0418 (Songda) and Typhoon 9119 (Mireille) in Western Japan.
- ・ Kohno, N. and M. Higaki: The development of a storm surge model including the effect of wave set-up for operational forecasting.
- ・ 山崎 明, 坂井 孝行: 地形の影響を考慮した茂木モデルによるピエゾ磁気効果.
- ・ Ogawa, K., T. Usui, S. Takatani, T. Kitao, T. Harimoto, S. Katoh, S. Dobashi, T. Midorikawa, H. Yoshikawa Inoue and Y. Dokiya: Shipboard measurements of atmospheric and surface seawater pCO₂ in the North Pacific carried out from January 1999 to October 2000 on the voluntary observation ship MS *Alligator Liberty*.
- ・ Naoe, H. and K. Okada: Modification of sea-salt particles in the remote marine atmosphere in the North Pacific.

気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物(ISSN 0386-4049)。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署など(国内約 800 部、国外約 250 部)で、気象研究所ホームページ(<http://www.mri-jma.go.jp/>)でも閲覧することができる。

平成 18 年度は、第 50 号を発刊した。

第 50 号 「2003 Intercomparison Exercise for Reference Material for Nutrients in Seawater in a Seawater Matrix (栄養塩測定用海水組成標準の 2003 年国際共同実験報告)」(地球化学研究部: 青山道夫)



4.2. 発表会、主催会議など

気象研究所研究活動報告会

研究活動報告会は、気象研究所の研究活動や研究成果について、広く社会一般の方々の理解を促進するため、気象研究所が進めている研究のうち、特に気象業務や国の施策に関係の深い事柄について報告を行うもので、新たな気象研究所の取り組みとして平成15年度から開始した。

4回目の開催となる平成18年度は、7月25日（火）に気象庁講堂（東京）で開催し、次の3題を報告した。

- ・集中豪雨の予測精度向上を目指して・・・・・・・・・・・・・・・・・・斎藤和雄
コメンテータ： 田中 博 氏（筑波大学 教授）
- ・大気と海洋における地球温暖化原因物質の
長期変動に関する観測研究・・・・・・・・・・・・・・・・松枝秀和
コメンテータ： 中澤高清 氏（東北大学 教授）
- ・ENSO・モンスーンシステムの過去、現在、未来・・・・・・・・・・鬼頭昭雄
コメンテータ： 植田宏昭 氏（筑波大学 講師）

気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を発表することにより、気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年1回開催している。

平成18年度は、平成19年1月26日（金）に気象研究所講堂で開催し、研究報告（平成18年度終了課題）と特別報告の計11題を発表した。

報告題目

- ・季節予測システムの構築と経年変動機構・予測可能性の研究・・・・・・・・安田珠幾
- ・エーロゾルの地表面放射への影響評価のためのエーロゾル光学特性の推定について
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・内山明博
- ・大気エーロゾルが積雪面の放射特性に与える影響・・・・・・・・青木輝夫
- ・海洋における炭素循環の変動に関する観測的研究・・・・・・・・緑川 貴
- ・特別報告 太平洋をUターンした津波
ー千島列島付近の地震による津波の数値解析結果ー・・・・・・・・長谷川洋平
- ・ヒートアイランド現象の再現・予測に関する基礎的研究・・・・・・・・三上正男
- ・都市ビル群上での乱流特性の研究・・・・・・・・栗田 進
- ・衛星搭載多波長赤外サウンダの利用技術に関する研究・・・・・・・・真野裕三
- ・特別報告 2006年11月7日の佐呂間町竜巻の現地調査報告・・・・・・・・鈴木 修
- ・特別報告 佐呂間町に竜巻をもたらしたスーパーセルの再現実験
ー水平分解能250mの雲解像モデルの結果からー・・・・・・・・加藤輝之
- ・非静力学モデル（NHM）の高度化と同化技術の改善に関する研究・・・・・・・・中村誠臣

竜巻シンポジウム ―わが国の竜巻研究の今後の課題と方向性―

平成 18 年 9 月に九州、11 月に北海道佐呂間町において竜巻により甚大な被害が発生したことを受け、他の自然災害と比較して、取り組みが進んでいなかった竜巻という現象について、これまでの竜巻研究および最新の研究成果を防災関係者や一般の方に紹介し、今後のわが国における竜巻研究の課題と方向性を議論することを目的として、気象研究所が主催して開催した。

このシンポジウムは、平成 19 年 1 月 23 日に気象庁講堂（東京）において実施され、国内の 6 人の研究者による講演と、講演者と気象庁からの 2 人のコメンテータを含めた総合討論を行った。

【講演】

- ・わが国における竜巻の発生状況
 これまでの研究の取り組みについて・・・・・・・・・・新野 宏（東京大学教授）
- ・竜巻の多様性
 －2006 年 9 月 17 日台風 13 号に伴う竜巻を中心として－・・・・・・・・小林文明（防衛大学校助教授）
- ・2006 年 11 月 7 日佐呂間町の竜巻の現地調査報告と
 今後の観測的研究の課題・・・・・・・・・・鈴木 修（気象研究所）
- ・雲解像モデルによる竜巻をもたらす積乱雲の再現シミュレーション・・・・・・・・加藤輝之（気象研究所）
- ・積乱雲と竜巻のシミュレーション実験・・・・・・・・・・坪木和久（名古屋大学助教授）
- ・竜巻に対する構造物等の設計上の問題点と気象分野への期待・・・・・・・・田村幸雄（東京工芸大学教授）

【講演者とコメンテータによる総合討論】

- 「わが国の竜巻研究の今後の課題と方向性」
- ・司会 新野 宏（東京大学教授）
- ・コメンテータ 赤枝健治、海老原 智（気象庁）